



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

外国にルーツを持つ家庭における母語使用の実態と  
課題：保護者に対する調査より

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-08-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野津,隆志, 乾,美紀, 杉野,竜美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/138672">http://hdl.handle.net/2309/138672</a>

# 外国にルーツを持つ家庭における 母語使用の実態と課題

—保護者に対する調査より—

Research on the Current Situation and Challenges of Mother Tongue Usage  
by Family with Foreign Roots: Through Investigation of the Parents

野津隆志 (兵庫県立大学)

Takashi NOTSU (University of Hyogo)

乾 美紀 (兵庫県立大学)

Miki INUI (University of Hyogo)

杉野竜美 (神戸大学)

Tatsumi SUGINO (Kobe University)

## <要約>

母語教育をめぐる先行研究では、母語学習の必要性が指摘されているが、母語使用の実態を詳細に明らかにする研究は極めて少ない。そこで、本研究では外国にルーツを持つ家庭を対象に、アンケート調査およびインタビュー調査を行い、①家庭の中での母語使用・母語教育の状況、②子どもの母語能力、③母語教育の重要性に関する保護者の見解を明らかにすることを目的とする。調査の方法として、アンケート調査では明らかになかったことを見い出すために、アンケート調査の後にインタビューを実施した。

調査の結果、保護者たちは、子どもが母語を継承することを望んでおり、様々な形で母語教育を行っていることが明らかになった。重要なことは、子どもの読み書き能力が低いにもかかわらず、保護者は母語を家庭で教えることを困難と感じ、地域のNGOやボランティアグループに任せていることである。

母語を大切にみなす理由は、先行研究で指摘されたように、「コミュニケーションツール」と「アイデンティティ形成」に言及する傾向があった。また、先行研究で指摘されてきたこと以外に、母語を大切に理由として「将来の選択肢を拡大する」という保護者の戦略を新たに発見することができた。母語学習が新たな可能性を追求するツールとして認識されている表れと言えよう。結論として、母語教室には人的資源や資金へのアクセスが限定されているため、このような母語教育の新しい価値の発見が母語教育の支援に貢献することに期待したい。

\*キーワード：外国にルーツを持つ家庭、母語使用、母語教育

## 1. はじめに

母語は、人が生まれてから一番初めに覚えた言葉、現在もっとも理解でき、頻繁に使用し、自分自身が一体感が持て、かつ周りの人もそう認める言葉である（カンガス、2008）。

兵庫県は2006年度（平成18年度）より、県内の外国人児童が就学する小中学校10数校で、新渡日外国人児童生徒（以下、外国人児童生徒と略記）に対する母語教育支援事業を開始した。日本では、母語教育は、組織的な取り組みでほとんど実施されていない未開拓分野のため、兵庫県の母語支援事業は、他府県では見られない独自の先進的な事業といえる<sup>(1)</sup>。

全国的に見ると、外国人児童生徒に対する母語教育は十分な取り組みがなされてこなかった。例外的に関西地域では韓国・朝鮮学校やそのほかの民族学校で「民族語教育」は行われてきたが、いわゆるニューカマーと呼ばれる新渡日の外国人児童に母語を教育することは、関西でもほとんど顧みられることなく、あっても日本語習得への補完的・補助的役割でしかなかったといえよう。太田が述べるように、従来、日本語の習得が授業へのアクセスの絶対条件であるという前提に日本の学校が立脚していたことがその大きな要因であろう（太田、2000年）。

今世紀に入り政府各省庁は、急増する新渡日外国人の生活や教育を保障するための施策や提言を相次いで出してきている。しかし、それらの施策提言では日本語習得のみが視野に入り、母語習得は視野に入っていない。たとえば文部科学省の「外国人児童生徒教育の充実方策について（報告平成20年6月）」によれば、文部科学省は外国人児童生徒に対する施策として、「JSL（第2言語としての日本語）カリキュラムの実践支援」「JSLカリキュラムの開発」「日本語指導教室の設置」「日本語指導等の専門的な研修」など日本語教育の拡充整備の重要性を

指摘しているが、母語指導に関する言及はない<sup>(2)</sup>。母語については、外国人児童生徒受け入れセンター校に「母語の分かる指導協力者やコーディネーターの配置」また「就学ガイドブックの多言語による提供」など、ごく一部の補完的役割しか与えられていないのが現状である。

そこで本研究では、兵庫県神戸市内に居住する外国にルーツを持つ家庭を対象に、アンケート調査およびインタビュー調査を行い、①家庭の中での母語使用・母語教育の状況、②親が思う子どもの母語能力、③母語教育が大切とみなしている理由について明らかにすることを目的とする。なお本稿では、外国人児童の定義として、両親ともに外国人または、親の一方が外国人である国際結婚の家庭も含む。

## 2. 母語教育をめぐる先行研究

現在、従来の外国人教育での「母語教育の不在」が批判されており、母語を教えることの重要性が心理学や教育学の立場から、次のように主張されている（野津、2010）。

### （1）教科学習と日本語能力の形成のための

#### 母語

母語教育の重要性は、まず言語教育学の知見から生まれ、教科学習や日本語能力形成に母語を活用するための理論的、実践的研究が蓄積されてきている。中でも、ジム・カミンズ（2005）の「生活・学習言語論」や「二言語相互依存仮説」は大きな影響力を持ち、母語教育の理論的根拠として、同時に日本の外国人児童の言語習得や認知能力の獲得の困難を説明する概念として言及されてきた。ジム・カミンズの理論に依拠し、日本でも母語の伸張が学校言語の力を伸ばすこと、バイリンガルの言語力は言語発達だけでなく教科学習や日本語学習にもプラスの影響を与えることが主張されている（清田、2006）（岡崎、2005）（中島、2005）（清田、

2006, 2008) (小田, 2008) (高橋, 2008) (穆, 2008) (櫻井, 2008)。

## (2) アイデンティティ形成のための母語

言語は文化の一部であり、子どもの文化的アイデンティティ形成に深く関わっている(関口, 2003) (山中, 2010) ため、母語教育の目的の一つとしてアイデンティティ形成が常に主張されている(松原, 2004)。石井(1999)は、母語の学習は子どもの自尊感情、自己肯定感を高め、情緒的な安定とアイデンティティ確立を支援すると述べている。また Banks(2004)は、外国人の子どもが母語を習うことにより、他者と効果的に繋がりあうことが可能となる、つまり母語学習は他者との人間関係も強めることを述べている。

## (3) 家族コミュニケーションのための母語

母語は、外国人児童が日本語習得困難な保護者とコミュニケーションをはかるための重要なツールである。幼少期に渡日した子どもや日本生まれの「2世」や「3世」の場合は日本語が優位となり母語習得機会を失いがちである(中山, 2010)。そのため、母語しかできない親とのコミュニケーションの断絶や親子の心理的不安定をもたらすことがしばしば指摘されている(吉富, 2001) (高橋, 2009)。こうした家族とのコミュニケーションの問題を解決するために、母語教育の重要性が主張されている。

## (4) 母語資源論

母語資源論は、地域社会や国レベルでさまざまな母語使用者を育成することの政策的意義を主張している。母語資源論では、多様な母語の使用者を社会的・人的資源として認め、多様な母語使用者を長期的に育成していくことが社会のメリットになることが主張されている(カミンズとダネシ, 2005) (松田, 2009)。カミン

ズとダネシ(前掲)によると、母語育成は、将来的にその国の国際協力や国際理解、外交関係にも役立つという。また、多様な言語使用者の拡大は、国際的な経済関係を発展させる「経済資源」としても重要であると主張されている。

以上に挙げた母語教育をめぐる先行研究では、様々な側面から母語学習の必要性が指摘されているが、必要性の論拠となるべき母語使用の実態を詳細に明らかにする研究は少ない。特に家庭内での母語使用の実態、親の母語学習に対する意識を明らかにする研究はほとんど見られなかった。そこで、本研究では神戸市内に居住する外国にルーツを持つ家庭を対象に、母語使用と母語意識に関する全般的傾向を把握することを目的として調査を行った。そして、それらの結果を、先行研究より指摘された母語教育の重要性と照らし合わせて議論を展開していく。

## 3. 調査の方法と概要

本研究における調査は、アンケート調査とインタビュー調査を併用して実施した。

まず、アンケート調査は外国にルーツを持つ家庭における言語使用と子どもへの教育の実態を知る目的で、2012年3月～9月に行った。アンケート調査の対象は、神戸市内の外国人集住地域に住む、外国にルーツを持つ学齢児童のいる家庭の保護者である。アンケートの配布・回収は、学齢期児童生徒を対象に学習支援活動を実施している2つのNPO団体に依頼した。調査票はNPOに所属する児童生徒数を聞いたうえで合計36部用意し、引っ越しのために連絡が取れなかった1家庭を除いて35部を回収した。アンケート調査票は、日本語のほか、英語、スペイン語、ポルトガル語で作成し、回答者の使用言語に合わせて配布した<sup>(3)</sup>。調査票の回答に要した時間は30分程度である。ここでは、添付のアンケートの調査事項から、以下の点に絞って次節より分析を進める。

1. 家庭内および友人間での使用言語
2. 子どもの母語運用力
3. 家庭内の母語教育
4. 母語の重要性と子どもへの期待

インタビュー調査は、アンケート調査で明らかになった外国人児童生徒の母語学習状況をもとにして、アンケートでは知ることができない、調査対象者の深い思いや考えを読み取るために、2012年9月～11月に行った。

#### 4. アンケート調査

##### (1) 調査対象の概要

アンケート調査対象者は35名（女性27名、男性7名、無記入1名）であり、その母語（または出身国）と来日時期は表1の通りである。スペイン語を母語とする回答者（16名）が最

も多く、次にベトナム出身者（9名）が多かった。

アンケート調査票の配布は、学齢期児童生徒を対象とした学習支援団体に依頼したため、回答者は学齢期の子どもの保護者である。回答者の子どもの年齢は4～20歳と幅があるが、いずれにも小学生（6～12歳）の子どもがおり、回答者には小学生の子どもを中心にアンケートに答えるように依頼している。

まず調査対象者の属性について説明する。彼らの来日理由で最も多いのは就労（18名）であり、次に結婚（4名）、家族滞在（3名）、難民およびその家族呼び寄せ（3名）と続く。来日理由を彼らの母語（または出身国）別に表したのが表2である。

回答者の最終学歴を見ると、高校と同レベル

表1 アンケート調査対象者の母語／出身国と来日時期

来日時期 \ 母語	ベトナム	ネパール	フィリピン	ポルトガル	スペイン	中国	インドネシア
～1999	4	1	0	4	4	0	0
2000～	3	0	1	1	10	2	1
不明	2	0	0	0	2	0	0
合計	9	1	1	5	16	2	1

表2 アンケート調査対象者の母語／出身国と来日理由

来日理由 \ 母語	ベトナム	ネパール	フィリピン	ポルトガル	スペイン	中国	インドネシア
就労				4	13	1	18
結婚	2	1		1			4
家族	1		1		1		3
難民	3						3
母国の悪状況					3		3
研修生	2						2
勉強					1		1
日本が好き					1	1	2
	8	1	1	5	19	2	1
							37*

(\*重複回答により、回答者数より多い合計数となっている。)

表3 アンケート調査対象者の母語/出身国と最終学歴

母語	最終学歴 中学在籍 ～卒業	高校在学 ～卒業	大学在学 ～卒業
ベトナム	3	3	
ポルトガル	2	3	
スペイン	3	7	5
中国		2	
インドネシア		1	
合計	8	16	5

(無回答があったために、回答者数と合計が同数でない。)

の教育段階に在籍していたか、もしくは卒業した者が多い(表3)。回答者の現在の職業は、弁当屋勤務、建築関係、翻訳など様々である。帰化の意思の有無を尋ねた質問では、検討している者とその意思がない者がほぼ同数であった。

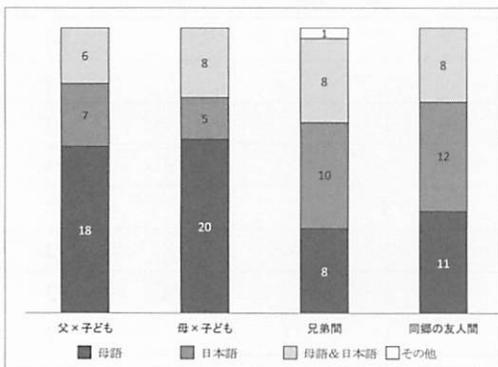
### 5. アンケート調査の結果

#### (1) 家庭内および友人間での使用言語

外国人児童生徒の使用している言語は、父母と子ども間で母語の使用が多く、兄弟間や友人間では日本語の使用が多い(図1)<sup>(4)</sup>。

家庭内の、特に親子間において母語が使用されている様子が伺える。この傾向は、回答者の母語(または出身国)別、学歴別、日本での居

図1 外国人児童生徒の対人別使用言語



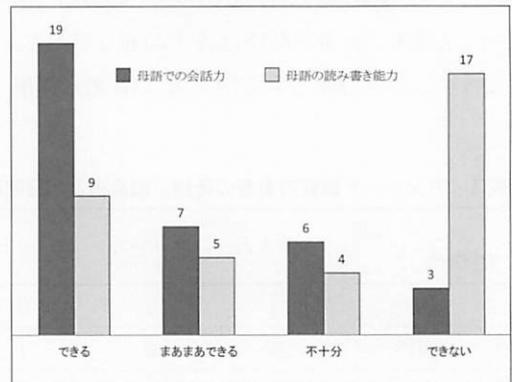
(各グラフは、外国人児童生徒の会話相手。数値は、回答数。)

住期間別の違いは見られない。そして、兄弟間や友人間で使用される言語では日本語が多い。この結果は、子ども使用言語が母語から日本語へとシフトする可能性を示唆している。

#### (2) 子どもの母語運用力

次に、回答者(親)が子どもの母語運用力(「会話」と「読み書き」)レベルをどのように捉えているか尋ねた回答が図2である。会話力に関しては、「できる(19件)」「まあまあできる(7件)」と回答されており、多くの家庭で母語が維持されていると言える。

図2 子どもの母語運用力(親の認識)



(各グラフは、子どもの母語運用力に関する親の認識)

しかし、少数回答とはいえ、「不十分(6件)」や「できない(3件)」という子どもの存在も看過できない。この「できない」と回答した3事例の回答者とその家庭概要を表4に表した。事例①のベトナム語を母語とする家庭では、回答者(親)が、学校や役所からの通知文書などの公的文書を読むことが出来ず、日本語に堪能ではないことが伺える。事例②のスペイン語を母語とする家庭(A)では、主な家庭内使用言語がスペイン語と回答している。それにもかかわらず、子どもは母語が「できない」と回答している。つまり、これらの2事例において、親子間のコミュニケーションが危ぶまれる。そして、事例③のスペイン語を母語とする家庭

表4 母語での会話が「できない」と回答した3事例の回答者とその家庭概要

母 語	家 庭 概 要
①ベトナム語	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 2001 年来日／呼び寄せ／高校卒業／</li> <li>● 日本語の通知は読めない／子どもに母語を教えている／</li> <li>● 家庭内言語はベトナム語 &amp; 日本語／子どもの読み書き能力「できない」</li> </ul>
②スペイン語 (A)	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 1992 年来日／就労目的／高校／</li> <li>● 日本語の通知は読める／子どもに母語を教えている／</li> <li>● 家庭内言語は主にスペイン語 (兄弟間では西・日・英語)／</li> <li>● 子どもの読み書き能力「不十分」</li> </ul>
③スペイン語 (B)	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 2001 年来日／出身国の状況が悪くて来日／大学</li> <li>● 日本語の通知は読める／子どもに母語を教えている／</li> <li>● 家庭内言語は日本語／子どもの読み書き能力「できない」</li> </ul>

(B)は、「父×子ども」「母×子ども」「兄弟間」「同郷の友人間」全てにおいて日本語の使用が主である。アンケート調査の回答者(親)の学歴は「大学」<sup>(5)</sup>であり、「日本語の通知は読める」状態にある。つまり、日本語に堪能であるがゆえに家庭内言語が日本語が主になり、母語の伝達が芳しくないと考えられる。

また、読み書き能力に至っては、「できない(17件)」と回答したケースが最も多く、「不十分(4件)」と合わせると全体の6割に相当する。

以上から、子どもの母語運用力を会話力と読み書き能力に分けて見た場合、多くの家庭で会話力が維持されている反面、読み書き能力は伝達されていないことが分かる。この実態を、「家庭内の母語教育状況」と「子どもの母語学習を望む理由」「母語の重要性」に照らしてみると、

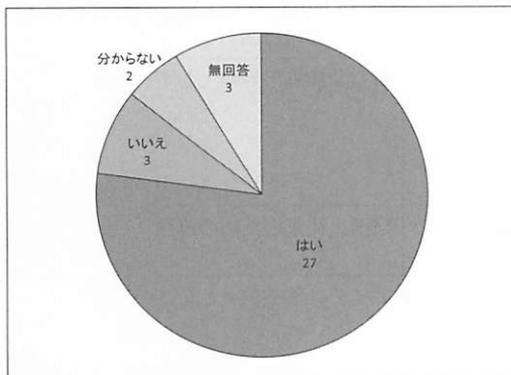
その理由が表出してくる。

### (3) 家庭内における母語教育

まず、外国人の親は子どもに母語を学習してほしいと望んでいるのだろうか。答えはYESである。全35回答中、27名が「子どもには母語を学習してほしい」と回答している(図3)。

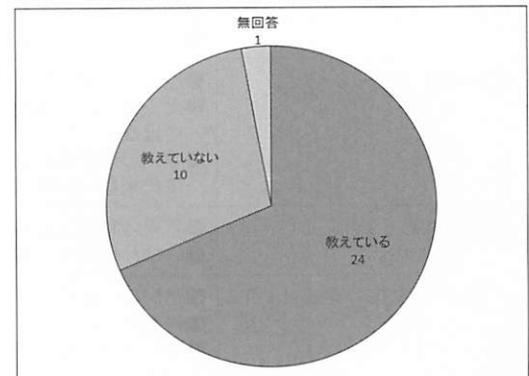
つまり、ほとんどの回答者が、子どもの母語学習を望んでいる。逆に、子どもの母語学習を望まないと回答した親もいるが、子どもが母語を継承することを望んでいないのではない。子どもの母語学習を望まないと回答した理由は、「中国で3年生まで習ったから、新聞や本など読める。」「ベトナム語での会話には問題はない」というものである。これは、現状の子ども母語レベルに満足しているからに過ぎない。

図3 「子どもには、母語を学習してほしいですか？」



(数値は、回答数。)

図4 「家庭内で、子どもに母語を教えていますか？」



(数値は、回答数。)

次に、回答者が家庭内で子どもに母語を教えているかどうかについて尋ねた。「家庭で子どもに母語を教えている」と回答したのは24名であり、全体の約2/3が何らかの形で母語を教えていることが分かった(図4)。この回答は、回答者の学歴による傾向は現れなかった。

大半の家庭で、何らかの形で母語を教えることは分かったが、“どのように”教えているかについて、アンケート調査では明らかにできなかった。これについては、インタビュー調査で追跡しているため、家庭内での母語教育の多様性と困難については次節にて詳述する。

#### (4) 母語の重要性と子どもへの期待

アンケート調査では「子どもには、母語を学習してほしいですか?」の質問とともに、理由を尋ねた。その回答をコード分析したところ、「①家族のコミュニケーションのため(11名)」「②知識への欲望・追求(5名)」「③帰国、または母国との往来のため(4名)」「④母国・母文化の理解(3名)」、⑤その他(1名)の5点にまとめることができる(表5)。

まず①では、「親とのコミュニケーションのため(ベトナム)」以外に「私の家族とコミュニケーションをするため(ブラジル)」「ペルー

の家族とも問題なく話せるように(ペルー)」というように、親子間だけではなく出身国の家族とのコミュニケーションを想定した回答が見られた。

次に②では、「ヨーロッパの子どもたちは3~4か国語を生まれた時から学ぶ環境にある。自分の子どもたちにもできないはずはない。将来のプラスになる。(ポルトガル)」「たくさんの知識を持っていても無駄ではない(アルゼンチン)」「色々な言葉を知ってほしい(ペルー)」など、有益な知識の対象として母語を捉えている回答があった。

また③では、「帰国した時、コミュニケーションが取れるようになるため。」「いつか帰国する時に役立つから。」「将来は私たちと帰国してほしいため」といった、一時帰国または日本の滞在を終えての帰国を想定した回答が得られた。

そして④では、「私たちの母語だから。」「彼もブラジル人だから。」「母国の文化を理解してほしい」というように、母語・母文化の理解を関連付けた答えがあった。これらは先行研究で指摘されたことである。また、⑤として挙げた「将来の選択肢が増えるから。」という回答は、母語を戦略として捉えている。先行研究であげた「母語資源論」では、母語を社会の資源とし

表5 子どもの母語学習を望む理由

コード	記入コメント	母語の役割
①コミュニケーション(11件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●親とのコミュニケーションのため</li> <li>●ペルーの家族と話せるように</li> </ul>	(家族との) コミュニケーションツールのための母語
②知識欲(5件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●色々な言葉を知ってほしい</li> <li>●たくさんの知識を持っていても無駄ではない</li> <li>●欧州の子どもに出来て自分の子どもに出来ないはずはない</li> </ul>	有益な知識の対象としての母語
③帰国目的(4件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●将来は私たちと帰国してほしい</li> <li>●いつか帰国する時に役立つから</li> </ul>	帰国・往来のための母語
④母国・母文化の理解(3件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●母国の文化を理解してほしい</li> <li>●母語だから</li> <li>●彼もブラジル人だから</li> </ul>	アイデンティティとしての母語
⑤選択肢の拡大(1件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●将来の選択肢が増えるから</li> </ul>	個人の資源として戦略的に捉えた母語

て捉えているのに対して、今回の回答では、母語を個人の資源として戦略的に捉えている点が興味深い。

次に、アンケート調査では、子どもの教育において、母語と日本語のどちらが大事だと思うかについても質問した。図5で示したように、多くの回答者が、「どちらも大事」と回答している。日本語を重要だと回答したその理由は、「日本で暮らしているから」「日本で生きていくために」といった、生活圏の言語として日本語を重要視しているものに加え、「日本の子孫でもあるので」といったアイデンティティに関わる回答もあった。

母語を大事だと考える理由から母語の重要性をまとめると、表6に示したように3点にま

とめることができる。

①と②に関しては、前述の「子どもの母語学習を望む理由」と同様の回答であった。③では、「将来、国際交流ができる」「競争ができる」「母語が上手だったら有利になる」といった母語を将来の人生において活用しようとする戦略的な意見が得られた。

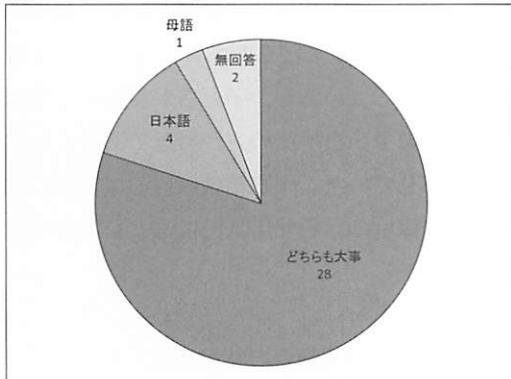
#### (5) アンケート調査のまとめ

アンケート調査で明らかになったことは以下の2点にまとめられる。

第一に、外国人児童生徒の主な使用言語は、親子間では母語を、兄弟間および友人間では日本語を使用し、使用言語はシフトしているが、多くの親は子どもが母語を継承することを望み、大半の家庭で（何らかの形で）母語を教えていることが分かった。

第二に、母語力は話し言葉は維持されているが、読み書きは伝達されていないことである。その理由は、「子どもの母語学習を望む理由」、「母語の重要性」から推察できる。すなわち、これらの質問では、母語がコミュニケーションツールとして重要であることと、アイデンティティとの関連で語られていた。コミュニケーションに関しては、（手紙やメールもコミュニケーションの一つとは言うものの）もっぱら話し言葉が重視される。また、アイデンティティと

図5 母語と日本語、どちらが大事？



(数値は、回答数。)

表6 母語の重要性

コード	コメント	母語の重要性
①アイデンティティ (7件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●母語だから</li> <li>●ベトナム人/ブラジル人だから</li> </ul>	アイデンティティ形成のための母語
②コミュニケーション (3件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●両親とのコミュニケーションに必要な</li> <li>●母語で話すべきフィリピン人の親戚がいる</li> <li>●いつもペルーの家族とコミュニケーションをとっているから</li> </ul>	家族コミュニケーションのための母語
③言語戦略 (5件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●将来は国際交流ができる</li> <li>●競争できるから</li> <li>●たくさん話せた方が良い</li> <li>●母語が上手だったら有利になる</li> </ul>	戦略としての母語

しての母語を想定した場合、(文学に触れることも重要だが) 必ずしも読み書き能力が求められるわけではなく、会話力が重要視されていると推察される。そして、母語教育のスタイルや読み書き教育の困難さが関係してくる。この点については、インタビュー調査でさらに深めていきたい。

## 6. インタビュー調査より

### (1) 調査対象の属性

調査対象は、アンケート調査回答者のうち、母語と子どもの学齢を均一化するために、まず2言語6名(スペイン語3名、ポルトガル語3名)を無作為に抽出した。さらに、アンケート回答の自由記述欄に、「子どもに家で母語を教えていたが途中でやめた」と書いていた保護者(MH)であり、筆者らはその理由を尋ねる目的でこの保護者にもインタビューを行った。インタビュー対象へのアポイントの調整は神戸市内の学習支援団体に依頼し、必要な場合は通訳を介した。

この6名は全て母親であるが、来日理由や国籍は様々であるので、概要は表7に示した。無作為抽出の結果、6名のうち2名が日本人との国際結婚であったため、両親が外国人である家庭と、国際結婚家庭の両方の状況を調べることができた。RCとMHはそれぞれ母国で知り合った日本人男性と結婚し、日本に定住している。

調査対象へのインタビューの手法は半構造化インタビューとし、主な質問は以下の通りであった。

1. 母語教育の状況(教え方など)
2. 母語教育の目的
3. 家庭外での母語教育

### (1) 家庭での母語使用言語

家庭での使用言語を見ると、JEの場合は、

家庭でポルトガル語とスペイン語で話している。JEの2人の子どもは、いずれも日本生まれであるが、ブラジル出身のJEはポルトガル語、ペルー出身の夫はスペイン語で子どもに話し、家庭ではほとんど日本語は使わないという。

調査対象のうち国際結婚家庭の場合は、母親(回答者)の出身国の言語を母語と捉えて回答を進めている。RCはスペイン語を母語とするが、本人が日本で通訳になりたいという希望を持つこともあり、日本人の夫と日本語で話し、家庭での使用言語も日本語である。一方、同じく日本人と結婚したMHの場合は、子どもの母語を維持させたい思いで家庭ではポルトガル語を話しているが、子どもと日本人の夫との会話は日本語の使用が多い。「夫は子どもを日本で大学まで進学させたいという思いを持っており、母語教育には賛成していない」という言葉から、家庭の中の使用言語に葛藤が見られる。JNは可能な限り子どもたちに、ポルトガル語で話そうとしているが、子どもが学校では日本語を使うので、日本語の方が得意であることに葛藤を感じていた。国際結婚家庭の場合は、親の意向が家庭の言語使用状況に強く影響している。

### (2) 家庭での母語教育の状況(教え方)

調査対象6名は全員が、家庭の背景に関わらず、子どもが自分の母語で話すことを望んでおり、家で母語を教えていると回答した。教える頻度は、1名の「不定期」を除き、毎日教えていると答えた。

家庭での母語教育は、表7に整理した通り、テレビ、DVD、インターネットなどのメディアを見せる(5)、テキスト使用(2)、聖書(1)、母語で話す(1)スペイン語の本を読む(〔重複回答〕という方法を用いていた。これらのことから、母親にとって、「母語を教える」ということは、テキストを用いて読み書きを教える

表7 インタビュー調査対象者の概要

名前	来日 年数	子どもの 年齢	本人・配偶者 (夫)の国籍	家庭での使用 言語	家庭での母語教育	母語教育の目的	家庭外での 母語教育
JE	1992	4,7歳	ブラジル ペルー	ポルトガル語	・映画・アニメ	ブラジルでの進 学	CBK (週 4h) ACCA(2h)
KY	2010	7歳	ペルー スペイン	スペイン語	・テキストを使用 (読み書きをゲー ム感覚で教える教 材) ・ビデオ ・スペイン語の教 育番組 ・インターネット	進学のため ルーツの認識	S 小学校 (週 2h)
DL	2000	4,9歳	ブラジル	スペイン語	聖書で教え、聖書 の内容を伝える (PCでも入手)	コミュニケーシ ョン	ASF (隔週 3h)
JN	1994	3,10,11歳	ブラジル	可能な限り ポルトガル語	・ビデオを見せる ・母語で話しかけ る	コミュニケーシ ョン仕事のチャ ンス 仲間がいて自信 がつく	CBK (毎週 4h)
RC	2002	4,6歳	アルゼンチン 日本	日本語	・テキストを使用 (書き方を教える) ・インターネット やテレビでアニメ を見せる	コミュニケーシ ョン世界の広が り 人とのつながり、 武器になる	HLC (隔週 2h)
MH	2005	9歳	ブラジル 日本	ポルトガル語	・テレビ、DVD、 スペイン語の本で 教えている。(か つては、テキスト を使っていた。)	ブラジル人だか ら (年に1度、2 ヶ月帰国)	S 小学校学 (週 2h)

ものではなく、テレビ番組やDVDを見せることや、母語で話しかけること自体も、母語教育と考えていることが分かった。熱心なキリスト教信者のDLは、「スペイン語を使って聖書の世界を伝える」ことを母語教育と捉えていた。つまり、全体として、何らかの形で母語に触れることを、母語教育と捉えていることが分かった。

一方で、テキストを使って読み書きを教えることは困難なようである。MHは、家でテキストを使って読み書きを教えようとした時のことを、以下のように話した。

「以前教えていた時は、ポルトガル語のアルファベットの書き方を教えて挫折した。息子はあまり勉強しなかったからだ。今は、テキストは使わず、テレビや、DVD、スペイン語の本を毎日1時間くらい見せる時間を作っている。今、簡単な挨拶ならパソコンを使ってポルトガル語で打てるようになった。」(MH)

親子間で勉強の時間を作り言葉を教えることは難しいようである。RCの場合も、子どもの気持ちに配慮しながらテキストで読み書きを教えている。

「もし嫌がったら強制しないようにしている。嫌がらないように工夫している、たとえば「今日はここまで頑張ろうね」などと声掛けをしている。」(RC)

以上のように、親子間でテキストを用いて教えることは難しいと感じ、それぞれが異なる形で母語教育を実施していることが結果として表れた。

### (3) 母語教育の目的

次に、母語を教える目的についての答えを整理していく。母語教育の目的について、6名の調査対象に語ってもらったところ、「母語が分かった方が世界が広がるし、武器になると思うから」(RC)、「自分のルーツなので、文化を保つために保持して欲しい」(KY)、「ポルトガル語がコミュニケーションに容易だから」(DL)、「ブラジル人だからポルトガル語を話すことが重要」(MH)、「日本での高校進学が難しい時は、母国で考えるのでスペイン語をしっかりと保持する」(KY)、「子どもが反抗期に入った時、両親が日本語が分からず、子どもも母語が分からないとコミュニケーションが取れない」、「いつか仕事をする時に、別の言葉を知っていたら仕事のチャンスが増える」(JN)など、様々な見解を得ることができた。特に日本人との国際結婚の場合は、自分(母)の出身国の言葉話して欲しいという気持ちが強く、MHは毎年の一時期帰国で子どもが家族や親戚と話すためにも母語を保持して欲しいと願っていた。

これらの多様なデータを整理するため、収集したインタビューデータの中から「母語教育の目的」に関連した言及や事柄を拾い出し、繰り返し現れるカテゴリーを抽出した<sup>6)</sup>。それらの言葉をカテゴリーに分類したうえで、キーワードとなった言葉を示すと、表8のとおりとなる。

表8 母語教育の目的と先行研究との関連

コード	母語教育の目的
コミュニケーション (3件)	コミュニケーション
世界の広がり・人とのつながり (3件)	個人の資源と戦略
仕事のチャンスの広がり・武器になる (2件)	
ルーツ・アイデンティティの維持 (2件)	アイデンティティ
自信を高めるため (1件)	
進学(母国での進学) (2件)	選択肢の拡大

これらのカテゴリーは、先行研究で指摘されていること重複している。すなわち、母語教育の重要性は、教科学習と日本語能力の形成、アイデンティティ形成のため、家族のコミュニケーションのため、母語資源論、の4つが挙げられていたが、このうちの2つが該当したのである。

一方で、先行研究で指摘された、「教科学習や日本語能力の形成のため」に関連する言葉が、アンケートの自由記述と同様に、インタビュー中誰からも一度も聞かれなかった。むしろ自国の親や親せきとの会話など、ルーツやコミュニケーションを尊重していたことが明らかになった。

また、インタビューでの新しい発見は、母国での進学を考え、そのために母語を維持するという傾向が見つかったことである。たとえば、調査対象は「日本での進学が難しい」(KY)、「ブラジルの方がお金がかからないから」(JE)という理由で母語での高校進学を考えており、そのために母語を維持すると熱く語ることがあった。これは、先行研究にはなかった「選択肢の拡大」という意味での母語教育の重要性として、解釈することができる。このようにアンケートの回答について、インタビューをすることにより、より深く読み取ることができた。

#### (4) 家庭外での母語教育

インタビュー調査に表れたように、調査対象は家庭で母語を教え、それぞれ目的も認識している。ただし、調査対象自身が期待する母語のレベルと、子どもの実際のレベルには乖離があるようだ。

インタビューでは、期待する母語能力と実際の子どものレベルについても尋ねていた。たとえば、「母語能力は、日本語でできる同じレベルを求めたいが、子どもは特に読み書きの力が低い」(KY)、「同年代の子どもと同じくらい書けるようになったり、難しい本を読めるようになって欲しい」と期待するDLは、「子どもは話せても、読み書きのレベルが低い」と答えている。同じ傾向は他の調査対象にも見られ、JNは「作文が書けるようになって欲しい」と期待するが実際は「話す、読む、書く力は低い」と答えている。インタビュー結果を概観すると、家庭では教えるに「読み書きの能力」について、子どもの能力が低いと感じている。そのために、家庭外で母語教室に通わせているのである。

表7にある通り、調査対象の子どもの全てが母語教室に通わせている。これらの母語教室は地域の外国人コミュニティやNPOが毎週(もしくは隔週)運営しており、これらの情報を親戚や友人などから得て通わせているとのことであった。各団体で、教える言語、教材は異なるうえ、場所もコミュニティにある教室から区をまたいで1時間近くかかる場所など様々であった。それぞれ母語教室を選んだ理由を聞いてみると、教育内容、母語教育の目的、送迎の有無、子どもの友人の有無、自分の仕事のシフトなど、など家庭のニーズや事情に合わせた教室を選んでいるとのことである。

JEは、毎週土曜日に子どもたちをポルトガル語教室に通わせており、子どもも積極的に勉強に行っているため、現状に満足している。

その理由を以下のように述べた。

「50人くらい子どもたちがいて、集まりが大きいから子どもたちも楽しいのだと思う。同じ国の人が集まって、お互いに理解できるというか、気持ちも分かるというのがよい。同じ国の子どもがたくさん集まっていることで絆を感じているのではないか。」(JE)

RCは、勉強だけではなく子どもの精神的な落ち着きを求めて母語教室に通わせている。

「子どもは、昔、母親がアルゼンチン人だということやスペイン語を話すことを子どもは恥ずかしがったり、嫌がっていた……でも母語教室に行って自分と同じような子どもがいると分かったようだ。勉強だけではなく、南米の子たちと遊びながら、親が外国人の子どもたちが他に居ることを知って欲しい。」(RC)

さらに、母語教室に子どもを通わせることで、保護者自身の精神にも安定をもたらせていることが明らかになった。たとえば、親は子どもと一緒に教室に出掛けることがあるという。その理由は、「母語教室がリラックスする場になる。」(JE)「(自分が)情報収集ができ、気持ちも落ち着く」(DL)からである。KYも「子どもがスペイン語を学ぶ場があるのは嬉しい」(KY)と、自分自身の喜びとして感じていた。

つまり家庭外での母語教育の場は、家庭では難しい「読み書き」を教える場を提供しているとともに、精神的なよりどころや居場所の役割を果たす重要な場所なのである。

### (5) インタビューのまとめ

ここで、インタビューにより明らかになったことを、まとめておきたい。

第一に、母語教育の重要性に対する親の認識を見ることができたことである。インタビューは両親または親のいずれかが外国人である家庭の両方を対象としたが、どちらの家庭においても保護者は母語を維持することを重要とみなしている。日本人との国際結婚家庭においては、日本で生きて行くために日本語が社会言語として必要なことも認識しながら、自分の出身国の母語を保持して欲しいという気持ちが強い。母語を学習することは外国にルーツを持つ家庭にとって、日本語を学ぶことと同じくらい重要なものとして認識されているのである。そのため、親たちは自分でも教える機会を持とうとしたり、母語学習教室に子どもを通わせるなどそれぞれが様々な試みをしていた。しかし、実際に子どもは聞く力、話す力は高まっても、読み書きを教えることや子どもが習得することを困難と感じ、子どもの読み書き能力も低いと認識しているのである。

第二に、先行研究との一致をみることができたこと、そして、先行研究にはなかった見解を得ることすなわち、母語を身につけておくことで、将来の選択肢を拡大する—というメリットを発見できたことである。アンケートでは、子どもが母語学習の目的として、選択肢が増えるという回答に留まったが、インタビューでさらに深い聞き取りをしてみると、母国で高校に進学することも考えるために母語をしっかりと学んでおくという回答を得たことは、将来どのように移動するか分からない家庭の不安定な状況や日本語で高校入試が突破できないのではないかと不安をぬぐうために、母語を学んでおくという戦略を伺うことができた。

## 6. おわりに

外国にルーツを持つ家庭では、両親の国籍など家族の背景に関わらず、日本語に加えて母語を学習することを望んでいる。そして、母語における会話力は保たれているものの、読み書き能力は失われつつある傾向がある。これは母語の重要性が、会話力を優先するコミュニケーションとアイデンティティの関連で捉えられているからだと推察できる。以上のことは、先行研究の見解と一致している。また本調査では、年齢は一定ではないが学齢期（小学生）の子どもを持つ家庭を調査対象に限定したところ、親は子どもに母語を教えているものの、そのスタイルは様々で、家庭でカリキュラムなどに沿って「系統立てて」教えることが難しいことも分かった。このことは、読み書き能力が低いことの一因となっている。そこで、家庭外での母語教室の存在意義を見出すことができる。母語教室は、家庭では教えることが困難な母語の読み書き能力を伝承する役割を担っていると言える。また、それだけではなく、外国人児童生徒とその親たちにとって精神的な安らぎの場となっているのも事実である。

本調査の結果、先行研究で指摘された、「教科学習と日本語の能力の形成」や社会全体のメリットとなるという意味での「母語資源論」については言及されることはなかった。親の立場としては、自分の子どもが母語を学習することが個人的な利益や資源となる、という当事者としての視点にとどまっており、社会のメリットになるとまで、関連付けられてはいない。また、先行研究で指摘されている、「教科学習と日本語能力形成のための母語」、つまり母語学習が学校での言語能力にプラスの影響を与えるという回答もなかった。これらのことは、当事者の視点として、当然のことかもしれないが、今後の母語教育の課題を考えるうえでの貴重な材料

となる。

本調査では、先行研究で指摘されてきたこと以外に、母語の意義・重要性として「将来の選択肢を拡大する」という保護者の戦略が新たに発見できた。外国人児童生徒にとって、母語学習が新たな可能性を追求するツールとして認識されている表れと言えよう。母語の新たな価値の発見が、母語教育支援の発展につながることを期待する。母語教室の中には、資金が限られており不安定な組織もあるのが現状である。母語教育は、公教育の中では実現するのが難しいため、母語教育に対する特別な助成拡大や母語教育を実施している外部の団体への支援が必要だと考えられる。

次に、本調査では家庭の回答から、母語学習が教科学習や日本語能力の育成につながるという見解は得られなかったことをふまえ、今後の展望について述べておきたい。現在のところ家庭の認識は浅いが、母語の学習が教科学習にもつながることを親が理解すれば、さらに母語教育の重要性の認識も高まるだろうし、そのことを学校などの教育機関が意識すれば、母語教育を公的機関でも実施しようとする試みがさらに高まると考えられる。また「母語資源論」が個人だけではなく社会のメリットにもつながることの認識が高まれば、公教育で母語教育を取り上げる意義が高まり、母語教育の拡大に影響するだろう。筆者らは、これらのことに期待したい。

最後に本調査ではいくつかの課題も残している。より一般的な調査結果を得るために、アンケート調査では年齢を統一することや回答者をさらに増やすことに配慮し、母語別（または出身国別）の傾向を分析することが必要である。また、今回のインタビュー対象者は、子どもの教育への関心が比較的高い家庭に偏重していた可能性がある。日本の学校や社会でマージナルな状況にいるのは、むしろ教育への関心が低い

家庭であることに鑑みれば、そのような家庭を対象とした調査が必要である。これらを追求するべく、さらなる調査・研究の継続が必要である。

#### 注

- (1) 母語支援事業は2006年～2010年まで実施された。事業では外国人児童が集住する地域の学校を「母語教育支援センター校」に指定し、放課後活動の一環としてNPOなどと連携した運営形態で取り組まれていた。具体的な経緯やNPOと連携した事例については、(乾・アルファロ, 2012)を参照。
- (2) 文部科学省ホームページ [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/042/houkoku/08070301.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/042/houkoku/08070301.htm)
- (3) 日本語で作成したアンケート調査票は、添付資料を参照。
- (4) 回答数が35に満たないのは、無回答があったからである。無回答の理由には、単親家庭や一人っ子なども含まれる。
- (5) アンケートでは、「大学」とだけ記されており、卒業したのか否かについては分からない。
- (6) 箕浦康子編著『フィールドワークの技法と実際—マイクロエスノグラフィ入門—』ミネルヴァ書房(1999年)

#### 参考文献

- Banks, J. 1994 *Introduction to Multicultural Education*, Allyn and Bacon Inc.
- Jim Cummins, J., & Danesi M. 1995 *Heritage Languages: The Development and Denial of Canada's Linguistic Resources: Our Schools/Our Selves*, Canada (中島和子・高垣俊之訳 2005 カナダの継承語教育 明石書店)
- OECD 2006 *Where immigrant students succeed: a comparative review of performance and engagement in PISA 2003*. (木下江美・布川あゆみ訳 2007 移民の子どもと学力：社会的背景が学習にどんな影響を与えるのか 明石書房)
- 乾 美紀, アルファロ・フランシスコ 2012 母語教育運営におけるアクター間の連携と現状—兵庫県における学校とNPOの取り組みから—多文化共生年報(7) 石井美佳 1999 多様な言語背景をもつ子どもの母語教育の現状：「神奈川県内の母語教室調査」報告 中国帰国者定着促進センター紀要 (7), pp. 148-187.
- 太田晴雄 2000 ニュージーランドの子どもの日本の学校 (国際社会学叢書—ヨーロッパ編) 国際書院
- 岡崎敏雄 2005 年少者日本語教育と母語保持：日本語・母語相互育成学習における学習のデザイン 鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ (編) 言語教育の新展開：牧野成一教授古希記念

- 論集 ひつじ書房 pp. 383-397.
- 岡崎敏雄 2005 外国人年少者の教科学習のための日本語習得と母語保持・育成：小学校中学年と中学生の学習支援 文藝言語研究言語篇 (47), pp. 1-13.
- 小田珠生 2007 母親による言語少数派生徒の母語保持・育成教育の可能性「母語・日本語・教科相互育成学習モデル」の実践から 言語文化と日本語教育(34), pp. 1-10.
- 清田淳子 2008 母語使用を受け入れる指導ストラテジーの分析：「教科・母語・日本語相互育成学習」に基づく実践から 人間文化創成科学論叢 (11), pp. 109-119.
- 清田淳子 2006 言語少数派の子どもの学習支援における母語活用の可能性の追求：来日直後の中国人児童を対象とした「国語」支援の実例からの検討 多言語多文化研究 (12), pp. 68-98.
- 金兌恩 2006 公立学校における在日韓国・朝鮮人教育の位置に関する社会学的考察：大阪と京都における「民族学級」の事例から 京都社会学年報 (14) pp. 21-41
- 櫻井千穂 2008 外国人児童の学びを促す学籍級のあり方：母語力と日本語力の伸長を目指して 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究 (4), pp. 1-26.
- スクトナブ・カンガス 2008 バイリンガル教育と、ろう児の母語としての手話言語 佐々木倫子 (監修) 全国ろう児をもつ親の会 (編) バイリンガルでろう児は育つ：日本手話プラス書記日本語で教育を！, 生活書院 pp. 60-66
- 関口知子 2003 在日日系ブラジル人の子どもたち：異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成 明石書店
- 関根政美 2000 多文化主義社会の到来 朝日新聞社
- 末英子 2006 在日朝鮮人の子どもの日本語による教育からの乗り越え 山本雅代 (編著) 日本のバイリンガル教育 明石書店
- 高橋朋子 2009 中国帰国者三世四世の学校エスノグラフィ：母語教育から継承語教育へ 生活書院
- 中島和子 2005 ポルトガル語を母語とする国内小・中学生のバイリンガル会話力の習得：言語教育の新展開 鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ (編) 言語教育の新展開：牧野成一教授古希記念論集 ひつじ書房 pp. 399-423.
- 中山尚子 2010 中国帰国者三・四世の母語学習とアイデンティティ形成：兵庫県の事例から (神戸大学大学院国際協力研究科修士論文)
- 野津隆志 2010 母語教育の研究動向と兵庫県における母語教育の現状 科研報告書 (基盤研究 C) 外国人児童の母語支援 NPO による多文化共生ネットワーク形成の国際比較 pp. 1-14
- 松田陽子 2009 多文化社会オーストラリアの言語教育政策 ひつじ書房
- 松原好次 2004 「外国人」児童生徒のための母語保障：神奈川県内の事例研究 河原俊昭 (編) 自治体の言語サービス：多文化社会への扉をひらく 春風社 pp. 15-36
- 箕浦康子 1999 フィールドワークの技法と実際—マイクロエスノグラフィ入門—ミネルヴァ書房
- 穆紅 2008 どのような母語保持努力が母語・日本語の認知面の発達を促すか：中国語を母語とする子どもの場合 世界の日本語教育。日本語教育論 (18), pp. 95-112.
- 湯川笑子 2004 3-5 世のための継承語教育：半世紀にわたる朝鮮学校教育実践の成果と課題 外国人児童生徒教育と母語教育 東京学芸大学国際教育センター 横浜市国際交流協会 2002 (YOKE) と横浜市立港中学校との連携による母語を生かした学習支援モデル事業 (実施報告書)
- 吉富志津代 2001 在日日系南米人の母語教育：草の根の活動現場から公的支援を考える KOBE 外国人支援ネットワーク (編) 日系南米人の子どもへの母語教育 (在日マイノリティスタディーズ I) 神戸定住外国人支援センター
- 吉富志津代 2009 在日日系南米人の母語教育：草の根の活動現場から公的支援を考える 兵庫県外国人児童生徒受入促進運営協議会資料

添付資料

## 外国人家族の言語環境調査表

この調査は、外国から来た家族が、家庭でどのような言語を使用し、子どもにどのような教育をしているか調べることで、今後の外国人家族への言語支援や教育改善に役立つ資料を作成する目的で行います。

あなたに回答していただいた内容をそのまま公開したり、あなたのお名前を外部に知らせることはありません。

ご協力をお願いします。

兵庫県立大学経済学部 野津隆志

調査日時 2012年7月初旬

### 1. 基礎情報

- ① あなたのお名前： \_\_\_\_\_
- ② あなたの性別： 男 ・ 女 （←に、チェック☑を入れてください）
- ③ 子どもの数と性別： (a. \_\_\_\_\_歳 男・女)  
 (b. \_\_\_\_\_歳 男・女)  
 (c. \_\_\_\_\_歳 男・女)  
 (d. \_\_\_\_\_歳 男・女)
- ④ 子どもの通っている学校名： (a. \_\_\_\_\_)  
 (b. \_\_\_\_\_)  
 (c. \_\_\_\_\_)  
 (d. \_\_\_\_\_)
- ⑤ あなたは、いつ日本へ来ましたか？（年月） \_\_\_\_\_
- ⑥ 日本へ来た理由は何ですか？ \_\_\_\_\_
- ⑦ あなたは、日本でどのような仕事をしていますか？  
 現在： \_\_\_\_\_ / 過去： \_\_\_\_\_ / その前： \_\_\_\_\_
- ⑧ あなたの最終学歴を教えてください： \_\_\_\_\_
- ⑨ 来日後（＝日本へ来てから）、何回、母国へ帰郷していますか？ \_\_\_\_\_回
- ⑩ 帰化を考えていますか？  
 はい  いいえ  分からない

## 2. 家庭内の使用言語

- ① 父と子どもは何語で会話をしていますか？ \_\_\_\_\_ 語
- ② 母と子どもは何語で会話をしていますか？ \_\_\_\_\_ 語
- ③ 子どもは兄弟たちと何語で会話をしていますか？ \_\_\_\_\_ 語
- ④ 子どもは同じ出身国の友達と何語で会話をしていますか？ \_\_\_\_\_ 語

## 3. 言語環境

- ① 学校の教科書以外で、  
母語の本は何冊ありますか？ \_\_\_\_\_ 冊
- ② 母語のビデオやDVDは何本持っていますか？ \_\_\_\_\_ 本
- ③ 母語の情報誌（ニュースレターなど）を読んでいますか？  
 読んでいる →（情報誌名：\_\_\_\_\_）  
 読んでいない
- ④ 学校の教科書以外で、  
日本語の本は何冊ありますか？ \_\_\_\_\_ 冊
- ⑤ 日本語のビデオやDVDは何本持っていますか？ \_\_\_\_\_ 本
- ⑥ 学校や役所からの日本語通知は読めますか？  
 読める  読めない

## 4. 子どもの母語能力と学習環境

- ① 子どもは、親と母語で普通の会話が  
 できる  まあまあできる  不十分  できない
- ② 子どもは、母語で読み書きが  
 できる  まあまあできる  不十分  できない
- ③ 家で、子どもに母語を  教えている  教えていない
- ④ あなた（親本人）は、子どもの学校の宿題を手伝いますか  
 手伝う  手伝わない

## 5. 子どもへの期待

① 子どもの将来の進学について話したことがありますか？

- ある → それは、どのような事ですか？ \_\_\_\_\_  
 ない

② 子どもには、学校はどこまで行ってほしいですか？

- 中学まで  
 高校まで  
 大学まで  
 その他 →具体的に \_\_\_\_\_

③ 子どもの進学について、困ったことがあれば書いてください。

---

---

④ 子どもには、母語を学習してほしいですか？

- はい  いいえ  分からない  
→ それはなぜですか？ \_\_\_\_\_

⑤ 子どもの教育では、母語と日本語のどちらが大事だと思いますか？

- 母語  
 日本語  
 どちらも大事  
 分からない  
→ それはなぜですか？ \_\_\_\_\_

⑥ 将来、子どもにはどこで仕事をしてほしいですか？

- 母国  
 日本  
 母国と日本と行き来できる仕事  
 子ども次第(子どもに決めさせる)  
 分からない

⑦ 将来、子どもにはどのような仕事に就いてほしいですか？

(可能であれば、職業名を書いてください。)

---

Research on the Current Situation and Challenges of  
Mother Tongue Usage by Family with Foreign Roots:  
Through Investigation of the Parents

Takashi NOTSU (University of Hyogo)

Miki INUI (University of Hyogo)

Tatsumi SUGINO (Kobe University)

The importance of mother tongue education is pointed out by previous academic research; however, few have investigated in detail. Therefore, this research aims to clarify the mother tongue usage and education in a home, children's competence of mother tongue and parents' perception on importance for mother tongue of family with foreign roots, by questionnaire and interview. As a research methodology, interview research was implemented after a questionnaire in order to interpret what was not able to be discovered in a questionnaire.

As a result of the research, it was found out that most of the parents expect their children to inherit the mother tongue and try to carry out in their own ways. The point is that despite the children's low competence of literacy, the parents feel difficulty to teach reading and writing at home, and as a result, they depend on mother tongues classes run by local NGOs or volunteer groups.

Regarding the importance of mother tongue education, the research targets tend to refer to "communication tool" and "identity formation" as pointed out by previous academic research. However, it was newly discovered that the parents cherish mother tongue education because they believe it can "expand future alternatives" for their children. This means the importance of mother tongue education is also recognized as tool for exploring new possibilities. In conclusion, it is expected that finding this new value will contribute to expand assistance for mother tongue classes since these classes have limitation in terms of human resources as well as financial accesses.

**Key Words** : Family with foreign roots, Mother Tongue Usage, Mother Tongue Education